ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会

第４５６回史跡めぐり

平成２７年１月４日（日）

『深川七福神めぐり』

深川の富岡八幡宮

芭蕉稲荷神社（深川の「芭蕉庵」跡）

「古池や　蛙飛びこむ　水の音」

と詠まれた芭蕉庵

第４５６回史跡めぐり　深川七福神めぐり

実施日　平成２７年１月４日（日）午前８時３０分・越谷駅東口集合

コース　越谷駅（8:47 急行中央林間行）－北千住―茅場町（9:28）－門前仲町下車（9:35）
－富岡八幡宮（恵比寿・横綱力士の碑）－冬木弁天宮（弁財天）―【寺町】―
深川閻魔堂―心行寺（福禄寿）―円珠院（大黒天）―龍光院（毘沙門天）―
霊巌寺（江戸六地蔵）―深川稲荷神社（布袋尊）―芭蕉庵史跡展望庭園―
芭蕉稲荷神社（芭蕉旧居跡）―深川神明宮（寿老人・解散）―
帰途例：森下駅（大江戸線）～清澄白河経由（半蔵門線）～北千住

深川というと、「深川芸者」「木場」「深川八幡祭り」の３つがあげられる。

Ａ．深川の芸者

江戸時代に栄えた芸者。富岡八幡宮の周辺の町家・商家の間に混在していた。羽織を着て寒中でも足袋をはかず、男まさりの心意気が江戸っ子の評判となった。男気の「いなせ」に対して、がさつで面倒見の「きゃん」である。新吉原（今の台東区千束４丁目あたり）の辰巳の方角（南東）にあたるので「辰巳芸者」ともいった。ここでは芸妓と娼妓との区別をはっきりさせ、芸妓はもっぱら揚屋と称する料理茶屋、娼妓は茶汲女と称し水茶屋で働いた。代表的な門前仲町（富岡八幡宮周辺）では「芸は売るが操は売らない」という厳しい掟があり、純粋に芸だけを売り物にしていたため、廃れずに後世まで生き残っていた。

Ｂ．木場

木場とは、水につけて材木を蓄えておく貯木場を意味するが、ここでは材木市場があり、材木商が集まっている現在の木場周辺をさす。江戸時代、江戸の町の材木需要を満たした。紀文（紀伊国屋文左衛門）や奈良茂（奈良屋茂左衛門）などの豪商がここを根城に活躍し金の雨が降るほどの繁盛であった。堀割（地面を掘って作った水路）が網の目のように縦横に見られていた。筏に組まれて遠くからやってきた材木は、海から隅田川を上り堀割を通って木場に運ばれた。その筏を扱う筏師を「川並」といい、鉢巻、袢纏、濃紺の股引と草鞋の職人姿で、水竿一本で原木を操り、「手鉤」と呼ばれる鳶口で原木を水中に転がしては産地や木の皮と切り口より木の良しあしを判断した。現在の木場は、東京湾沿いに埋め立てられた「夢の島」に「新木場」として移転された。

毎年１０月に木場公園のイベント池で「木場の角乗」が行われている。水面に浮かべた材木の上で巧みに乗りこなす曲芸は、筏を組む仕事の中から生まれ、川並と呼ばれる筏師が手鉤と呼ばれる鳶口一つで太く大きな丸太を自由に操った。他には、「木場の木遣り」、「鳶の木遣り」、「深川の力持ち」も実施され、すべて都の無形民俗文化財に指定されている。

Ｃ．深川八幡祭り

深川の富岡八幡宮の例祭は８月で、３年に一度の本祭りでは延べ８．５㎞にわたる長い距離を神輿が担がれる。暑さの中、担ぎ手に水を掛けるので水掛け祭りともいう。神田明神の神田祭り、赤坂の日枝神社の山王祭りとともに江戸三大祭りの一つである。

◎門前仲町（もんぜんなかちょう）の「門」とは永代寺（えいたいじ）をさす。

ここ永代島に江戸時代初期に創建された永代寺は、現在の深川公園や深川不動堂に及ぶ広大な境内を持つ寺院となり、富岡八幡宮の別当寺として栄えた。門前仲町の門とはこの永代寺をさしたが、明治初年の廃仏毀釈で廃寺となった。

１．富岡八幡宮

深川八幡祭りで知られる神社で、深川七福神の内、恵比寿さまを祀る。

伊能忠敬像

２．伊能忠敬像

富岡八幡神社から測量の旅に出かけようとする場面。八幡神社の近くに住み（深川黒江町、現在の門前仲町一丁目）、測量の旅に出かけるたびに必ずここに立ち寄って無事を祈願した。

３．大関力士の碑

釈迦ヶ岳の身長は２２７センチ。当時の相撲取りの大きな手形、足形も見られる。江戸時代の人々の身長は１４０㎝から１５０㎝くらいであった。

八幡祭（水かけ祭）の神輿

４．神輿庫

深川八幡祭りの現在の神輿がここに奉納されている。

紀伊国屋文左衛門が奉納したとの言い伝えさえある総金張りの豪華な神輿が３基あったが、関東大震災で焼失。

平成３年に、金箔でおおわれ、鳳凰のトサカに多くのルビーが使用し、鳳凰や狛犬、小鳥の目にはダイヤがはめ込まれた４．５トンの神輿が完成。俗に１０億円神輿とも。平成９年に造られた２トンの神輿も金箔で、鳳凰の目には２．５カラットのダイヤがはめ込まれている。

５．木場木遣りの碑

「木遣り」の意味は、重い材木などを、音頭をとり、掛け声を掛けて送り運ぶこと。碑にあるボタンを押すと木場の木遣り歌が朗々と流れるという。以下は現地の説明文。

「木場の木遣りの由来」

「木場の木遣り」の発祥は古く、現存の文献によれば、既に慶長初期の昔に行われている。当時、幕府のお船手の指図で、伊勢神宮の改築用材を五十鈴川より木遣りの掛け声で水揚げをした、とある。元来、神社仏閣の鳥居や大柄な用材を納める場合には木場木遣り特有の「納め木遣り」が用いられ、保存会により今日に伝えられている。

元禄の始めには、武家屋敷の並ぶ両国の七つ谷の倉の間部(まなべ)河岸という所で三代将軍家光公に筏の小流し（さながし、筏組)、角乗り、木遣りをご覧に入れ、以後年中行事となった。この時、川並みという言葉が発祥したと伝えられる。

明治十二年、米国のグラント前大統領が来日の際に、木遣りは角乗りと共に上野の不忍(しのばずの)池で天覧の栄に浴している。

江戸の昔より正月二日から七日にかけ木遣りにて初曳きし、材木屋さんに売り捌(さば)くのを年中行事としていた。

木場の木遣り　　江東区無形民俗文化財登録
東京都無形民俗文化財指定

※「間部（まなべ）河岸」は、現在の隅田川そばの浜町公園と両国橋の中程、東日本橋１丁目の日本橋中学校あたりにあった。

※木場の木遣り歌（「江東おでかけ情報局」より抜粋）

木場の木遣（きやり）は、徳川家康が江戸城造営の時に連れてきた材木商が伝えたものと言われていますが、確かなことは不明です。 木場の筏師（川並(かわなみ)）が、鳶口(とびぐち)ひとつで材木を操る時の労働歌で、たがいの息を合わせるため、掛け声のように即興の詩をつけて歌ったものです。 そのため木の大きさによる仕事のテンポの違いから、それぞれフシ（間(ま)）の異なるものができました。 近年は各地からの職人が集まるようになって、仕事場では歌われなくなり、今では保存会の人たちによって祝儀の場などで歌われています。

６．木場の角乗り碑

「角乗りの由来」

木場の角乗りは三百余年の昔徳川幕府から材木渡世の免許を与えられた業者の木材を扱う川並(かわなみ)の祖先の余技として進展し、若者の技術練磨の目的を以て今日に伝わるものである。其の間、明治初年、三島警視総監時代、水防出初(でぞめ)式に始めて浜町河岸で披露。又グランド将軍が来朝の際、上野不忍の池にて催し後、須賀に於て軍艦進水式の折り、　明治天皇の天覧の栄を賜る。其の後、浜離宮や両国橋開通式の祝事に披露されて来た。

第二次世界大戦により中断したが戦後有志相椅(あいもたれ)り、東京木場角乗保存会を設立し、昭和二十七年九月、東京営林署貯木場に於て披露し、同年十一月三日、東京都文化保存条例に基き、都技芸木場の角乗りとして無形文化財に指定された。

昭和三十九年十月三日　東京木場角乗保存会建立　　石井玉泉書

木場の角乗り（「江東おでかけ情報局」より）

木場の角乗（かくのり）は、江戸時代に木場の筏師（川並）が、水辺に浮かべた材木を、 鳶口ひとつで乗りこなして筏に組む仕事の余技から発生しました。これに数々の技術が加わり、芸能として発達しました。角乗に用いられる材木は、角材を使用するため、丸太乗りより技術を必要とします。角乗の演技に合わせて、 葛西囃子が速いテンポで演奏されます。

７．七渡弁天（通過のみ、お参りしない）

江戸時代以前から七渡りの浦に祀られてきた弁天社。江戸時代以前、このあたりは「七渡りの浦」と呼ばれたところで、当時よりここに弁天社が祀られていたという。なお、現在、この入口あたりに江戸時代初期の三猿庚申塔が移されている。

横綱力士の碑

８．横綱力士の碑

初代明石志賀之助から７１代鶴竜まで刻まれている。

江東区指定有形文化財（歴史資料）「横綱力士碑」

この横綱力士碑は、横綱の顕彰と相撲の歴史を伝えるため、江戸時代最後の横綱第十二代陣幕久五郎が中心となり、明治三十三年に建てられました。

古くから庶民に親しまれてきた相撲は、江戸時代には幕府公認の勧進相撲（寺社修復などを目的に実施）へと発展し、大坂・京・江戸で興行として開催されました。幕府がはじめて江戸での勧進相撲を認めたのは、貞享元年（一六八四）の富岡八幡宮境内でした。その後、明和年間（一七六四～七一）には、春・秋二場所のうち一場所がこの地で開催され、富岡八幡宮は江戸勧進相撲の発祥地といえます。

偉容を誇る横綱力士碑は、同時期に建てられた陣幕・不知火顕彰碑や周辺の石造物（魚かし石柱、土台下玉垣は大正末ごろ）とともに、相撲と地域のつながりを示す貴重な文化財です。

平成十六年二月　　江東区教育委員会

９．富岡八幡宮の本殿（通過のみ、お参りしない）

１０．力持ち碑

深川の倉庫業者の労働者の間で行われた力比べの曲技を記念したものである。そばには力石が奉納されている。力持ちの曲技は現在でも引き継がれ、東京都の無形民俗文化財となっている。

「深川の力持ち」（「江東おでかけ情報局」より）

深川の力持（ちからもち）は、江戸時代からの倉庫地帯であった佐賀あたりで、米俵や酒樽などの運搬から発生した余技で、種々の力自慢が加わり、芸能として発達したものです。文化・文政のころ（１９世紀初め）には、興行として行われるほど盛んになり、長唄「近江のお兼」にもうたわれています。演技には、米俵、臼、小舟、脚立、長柄、小桶、木箱などが用いられ、砂村囃子がはやします。

七福神・第１番目「恵比寿」（富岡八幡宮境内にある恵比寿宮）

１１．和倉橋跡（かつての「和倉の渡し」）

和倉橋の親柱

油堀川が流れ、昭和の初めまで和倉の渡しがあった。その後、橋が架けられた。

昭和５０年、油堀川は埋められて橋は取りはずされた。油堀川の上には深川線の高速道路が走っている。現在、親柱が現地に保存されている。

和倉橋由来

この付近は、幕府賄方組屋敷があり、椀をしまう倉があったことから「わんぐら」「わぐら」といった。明治二年からこの付近の町名を深川和倉町といい、油堀川に「わくらの渡し」があった。

昭和四年、ここにはじめて和倉橋がかけられ、橋は長さ二十・四メートル、幅十一メートルの鉄橋であった。

昭和五十年、油堀川が埋められたので和倉橋はとりはずされた。

昭和六十三年十二月吉日　　深川二丁目南町会

江東区役所道路課

七福神・第２番目「弁財天」（冬木弁天堂）

冬木弁天堂は、木場の材木豪商となる冬木弥平次が宝永２年（１７０５年）に、茅場町から深川に屋敷を移した際、庭の大きな池のほとりに江ノ島の弁財天の分身（江ノ島の弁財天と同じ裸形弁財天）を安置したのが始まりである。その時に町名も冬木町と称した。

【このあたりは寺町】

冬木弁天堂あたりから北方、小名木川にかけて寺町と呼ばれた。

地名にいうと、深川２丁目、平野１丁目、三好１丁目、三好２丁目、清澄３丁目、白河１丁目あたりである。

１２．伊能忠敬の住居跡（現地には行かない、場所の説明のみ）

日本地図を作った伊能忠敬の住居は、当時の深川黒江町にあった。ここを測量の原点とした。現在の門前仲町１丁目１８番地、浅井そろばん塾近くに記念碑が建っている。

１３．深川閻魔堂

江戸時代から「深川の閻魔様」として知られている。現在の閻魔大王像の大きさは日本最大。かつては「藪入り」の時にお参りする人が多かった。

※閻魔さまと藪入り

深川の閻魔様

藪入りとは、かつて商家などの主人の家に住み込み奉公していた丁稚や女中などの奉公人が実家へと帰ることのできた休日。正月（1月）とお盆（7月）の１６日がその日に当たっていた。この日は地獄で閻魔大王が亡者（もうじゃ）を責めさいなむことをやめる賽日（さいにち）、つまり閻魔大王の休日である。主人の家で働く奉公人は、実家への帰り道に深川の閻魔堂に立ち寄って参詣したという。この藪入りの伝統は現代に正月や盆の帰省として名残を残している。

七福神・第３番目「福禄寿」（心行寺の六角堂）

１４．採茶庵（さいとあん）

松尾芭蕉像

旅支度が終了した松尾芭蕉が、元禄２年、弟子の別邸のここより奥の細道へ出発したところ。松尾芭蕉が奥の細道に門人に見送られながら出発しようとする様子を表した芭蕉像がある。芭蕉はこれより舟で仙台堀より隅田川に出て千住に向かった。

１５．滝沢馬琴の誕生の地

南総里見八犬伝を書いたことで知られる滝沢馬琴に俳諧を教えた人は、方言学の祖といわれる越ヶ谷町出身の越谷吾山である。

七福神・第４番目「大黒天」（圓珠院の大黒堂）

円珠院にある大黒堂は江戸時代には「深川の大黒さま」として知られていた。

七福神・第５番目「毘沙門天」（龍光院の本堂）

１６．阿茶局（あちゃのつぼね）の墓（雲光院の墓地）

阿茶局は徳川家康の側室で、大坂冬の陣には家康の和睦の使者として大坂に出向き、淀君と会い、和議を成立させた。晩年は尼となり雲光院と称し、雲光院を開基する。雲光院の墓地には阿茶局の墓（宝篋印塔、近世前期の様式をよく示している）がある。

１７．江戸六地蔵の一つ（霊巌寺（れいがんじ））

「江戸六地蔵」は、江戸時代に深川に住む地蔵坊正元（しょうげん）によって江戸の町の中の六ヶ所に設置された。このお地蔵様の全身には、お地蔵様を作るために募金した多くの人々の名前がいたるところにびっしりと刻まれている。なお、松平定信の墓もそばにある。

仏さまは背の高さが丈六（一丈六尺、約４メートル８０ｃｍ）で、全身が金色で輝いているとされるが、このお地蔵様も丈六仏で、本来は金箔が全身に施されていた。現在も一部金箔の跡が残っている。

なお、江戸六地蔵は江戸の六ヶ所の出入り口に設置されたとされる俗説があるが、誤りである。

一番札所　品川の品川寺（ほんせんじ）　　東海道筋
二番札所　新宿の太宗寺（たいそうじ）　　奥州街道筋
三番札所　巣鴨の眞性寺（しんしょうじ）　甲州街道筋
四番札所　浅草山谷の東禅寺（とうぜんじ）中山道筋
五番札所　深川の霊巌寺（れいがんじ）　　地蔵坊正元が住む地元深川、水戸街道とは無関係
六番札所　深川の永代寺（えいたいじ）　　地蔵坊正元が住む地元深川、千葉街道とは無関係

なお、六番札所となる永代寺の地蔵尊(享保５年造立)は富岡八幡宮の二の鳥居付近にあったといわれるが、残念ながら明治元年(1868)の神仏分離令による廃仏毀釈により取壊されてしまう。それ以外の五体は全て現存し、東京都指定有形文化財に指定されている。

千葉街道（現在の「旧千葉街道」、小松川線の高速道路が通っている竪川〈江戸城から見て縦に流れる〉の北岸沿いの道）は明治になってから呼ばれた新名称で、江戸時代は旧佐倉道と呼ばれていた。深川霊巌寺（もとは別の所、永代橋の東側の霊巌島にあったという）、深川永代寺とも、水戸街道や旧佐倉道とはかなり離れていて無関係である。

東京都指定有形文化財（彫刻）　**銅造地蔵菩薩坐像（江戸六地蔵の一つ）**

所在地　江東区白河１―５―２２　　指定　大正１０年５月

江戸六地蔵の由来は、その一つ太宗寺の像内にあった刊本「江戸六地蔵建立之略縁起」によれば、江戸深川の地蔵坊正元が不治の病にかかり、病気平癒を両親とともに地蔵菩薩に祈願したところ無事治癒したことから、京都の六地蔵に倣って、宝永３年（１７０６）造立の願を発し、人々の浄財を集め、江戸市中六か所に地蔵菩薩をそれぞれ一軀ずつ造立したと伝えられています。各像の全身及び蓮台には勧進者、その造立年代などが陰刻されており、神田鍋町鋳物師太田駿河守正義によって鋳造されたことがわかります。六地蔵のうち、深川にあった永代寺の地蔵菩薩（第六番）は廃仏毀釈で取り壊され、五軀が残っています。

六地蔵のうち、霊巌寺の地蔵は第五番目で、享保２年（１７１７）に造立されました。他の六地蔵に比べ、手の爪が長く、宝珠を持つ左手の指のうち、四本の指が密着した形になっています。像高は、２７３ｃｍあり、かつては鍍金が施されており、所々に金箔が残っています。

江戸時代中期の鋳造像としては大作であり、かつ遺例の少ないものであることから文化財に指定されました。

平成２３年３月　　建設　　東京都教育委員会

１８．清澄庭園（見学はしない、外のトイレ休憩のみ）

江戸時代の木場の豪商、紀伊国屋文左衛門の別邸跡。明治になると、三菱財閥の創業者の岩崎弥太郎所有の庭園。現在は東京都の所有。

七福神・第６番目「布袋尊」（深川稲荷神社）

この周辺には相撲部屋が多い（尾車部屋、北の湖部屋、大鵬道場のある大嶽部屋、錣山部屋、高田部屋）。

萬年橋

清州橋

１９．萬年橋（万年橋）

この橋から望む富士山の景観は、葛飾北斎の浮世絵で知られ、また、この近くには深川芭蕉庵があった。

２０．清州橋（ケルンの眺め）

清州橋は、ドイツのケルン市のライン川に架けられた当時の大吊り橋をモデルにしていて、この場所からの眺めが一番美しいといわれる。

史跡展望庭園（芭蕉翁像）

２１．芭蕉庵史跡展望庭園

隅田川と小名木川に隣接し、四季折々の水辺の風景が楽しめる。庭内には芭蕉翁像や芭蕉庵のレリーフを配し、往時を偲ぶことができる。

芭蕉翁像は、午後５時になると隅田川に向かって像が回転し、像はライトアップされ、隅田川を行く船々を見守っているかのようである。

（以上、江東区文化コミュニティ財団の解説文を参照した。加藤）

２２．芭蕉稲荷神社（深川の松尾芭蕉旧居跡）⇒表紙の下段のカット参照

「古池や　蛙飛びこむ　水の音」と詠んだといわれる深川の芭蕉庵の跡である。

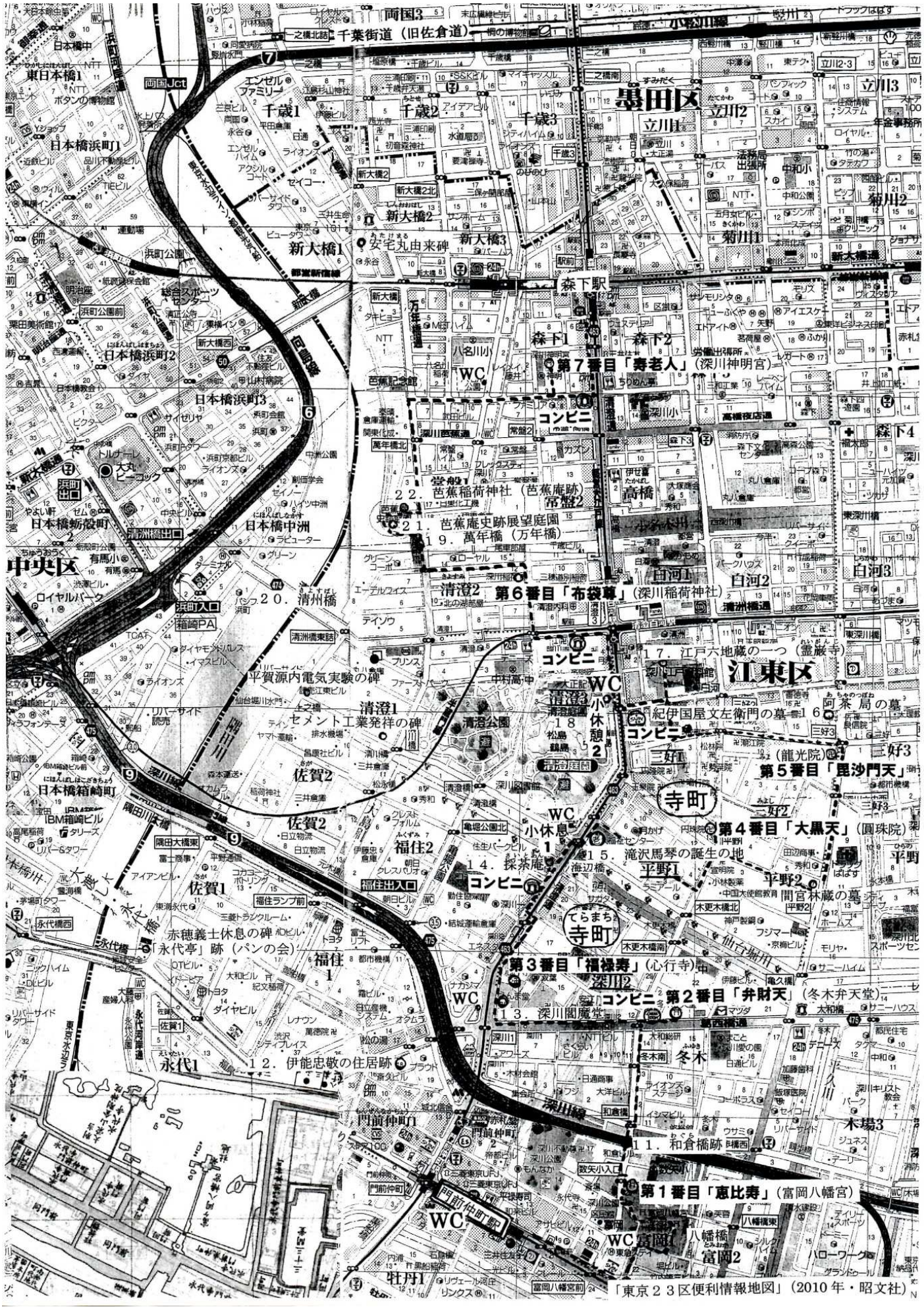
七福神・第７番目「寿老人」（深川神明宮）

次は、現地の解説文より抜粋。[　]内の加筆は加藤

[深川神明宮のある]この辺り一帯は、慶長年間（１５９６～１６１４）に摂津国（大阪府）の深川八郎右衛門ほか６人が新田を開拓し、八郎右衛門の姓をとり、深川村と名付けられた、深川村発祥の地です。八郎右衛門は持地内の小祠に神明を勧請したと伝えられ、これが深川神明宮です。

のち、現在の新大橋・常盤・高橋・森下・猿江・住吉あたりの開拓が進み、八郎右衛門は代々名主をつとめました。

昭和五十二年十二月二十六日の読売新聞都民版「ストーリーストーリー」より抜粋・イラストは成田明也氏



「東京２３区便利情報地図」（2010年・昭文社）